

2022. 1. 22. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書6章6b～13節
『招きに応じて生きる』

新年を迎えるということは、同時に天上へと旅立たれた愛する者と共に歩んだ日々を思い起こすことにも通じます。その生と死の意味するところは今を生きるわたしたちに何を語りかけているのかを確認するために、わたしたちは礼拝の場へと招かれる面もあるのです。人生は旅であるとよくいわれます。けれども、一体どこからどこへと旅を続けてゆくのでしょうか。いろんな言い方があります。例えば、古いものから新しいものへ、出来ない者から出来る者へ、未熟さから完成された者へ、偽物から本物へ等々。しかし、愛する者を想う時、そんなことではなかったと思知らされるわけです。

わたしたちは人生を自分のものと考えて自分の好きなように変えて行こうとします。しかし、そのような生き方ではなく、人生とは与えられたものと考えて受け止めて行こうとする生き方への旅ではなかったかと思うのです。

前回学びました6章1～6節aと本日の6章6b～13節は6節のaとbで繋がられております。これは物語の継続性を強調する方法です。つまり、前回と本日の箇所は一連の物語であるということなのです。

さて、前回学びましたイエスの故郷であるナザレの人々は、イエスの言葉を拒否しました。その言葉はルカ4章16節以下に記されているように「貧しく・弱く・小さい者」を神は大切にされるという内容でした。この言葉を福音としてナザレの人々は受け入れることが出来なかったのです。なぜならば、人々にとって人生で大切なことは「富んで・強く・大きい者」になることだったからです。

それらに対比して、本日の箇所ではイエスの言葉＝福音に生きる人々の姿が具体的に書き記されて行きます。12人の弟子たち、それは初代教会の姿そのものでした。そこに書かれているのは彼ら・彼女らがイエスの十字架と復活に生かされている当時の生活そのものだったです。

その生活は8節にあるように「何も持たず」というものでした。初代教会は個人財産を持たない共同体として出発しておりましたので、私物はごくわずかだったことが分かります。

実はこの「何も持たずに」ということが、イエスの「招きに応えるために」大切な条件でもありました。「何も」というのは物質的な物のみではなく、権力や欲望・差別や暴力といった体質的な執着を意味しているのです。つまり、キリスト者とはそれらを持たない者のことなのです。もう少し言葉を尽くせば、「貧しく・弱く・小さい者」を招かれるイエスの言葉を福音と信じた者たちは、この世の「富んで・強く・大きい」様々な事柄から「手を離すことの出来る自由」をすでに与えられているのではなかったでしょうか。

パウロも「悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」(Ⅱコリ6:10 口語訳)と語ります。

わたしたちの愛する者も、そのようなイエスの招きに応える豊かな人生を送られたことを想い起こしたいのです。

愛する者との別れは悲しみです。そのことは何ものにも置き換えることの出来ない悲しみです。時の流れでさえ解決をもたらしてはくれません。しかし、神を信じる者はたとえ深い悲しみであっても不平はないことを告白出来るのです。